第１章　遺跡の立地と環境

１　遺跡の名称と立地

庄・蔵本遺跡とは、徳島市庄町から蔵本町一帯にひろがる庄遺跡の徳島大学構内地点を指す。この名称は当調査室が暫定的に使用する遺跡名であり、文化財保護行政上の名称はあくまでも徳島市庄遺跡であることを断っておかねばならない。地籍の上では本学の構内部分の大半が蔵本町に属しており、庄町の一部がかかるに過ぎないといった名称上の齟齬が生じている点や、庄遺跡の範囲が相当広域に及び、地点ごとに様相が異なる事実が判明しはじめたところでもあり、地点を分けて呼ぶ必要性が高まりつつあることなどが、上記のような別称を付すにいたった主たる理由である。

この遺跡は、四国の東部を中央構造線に沿って東方に流れ下る吉野川の下流域右岸に位置する。南側には四国山脈の東端にあたる眉山（びざん）を控え、西側には吉野川下流域最大の支流である鮎喰（あくい）川が北流する（序章図１参照）。

遺跡の周辺一帯は、鮎喰川が形成した扇状地の末端付近に位置しており、遺跡地は眉山北麓の微高地上を中心に営まれたものと推定されるが、近年の地理学的検討の成果にもとづけば、北側と東側には無数の旧河道と帯状にのびる微高地とが認められ、デルタ状の地形がひろがっていたと推定されている。今日でこそ徳島平野とも呼ばれる肥沃な農耕適地として知られるが、近世までの状況は、洪水に悩まされる低湿地と、水のかかりが悪く水田化が困難な微高地とが交互に表れるといった、複雑で起伏にとんだ地理的環境であったらしい。

２　周辺地域の歴史的環境

庄・蔵本遺跡の周辺域一帯には、縄文時代晩期から江戸時代にいたるまでの長期間にわたる複合遺跡が豊富に残されており、最近の発掘調査の成果によって、庄・蔵本遺跡をとりまく周辺地帯の歴史的環境が次第に明らかになりつつある。ここではその概要を時代ごとにたどってみたい。登場する遺跡名の後に付したカッコ内の番号は図７の番号と対応する。

旧石器・縄文時代　旧石器時代の資料は、吉野川の堆積作用によって地中深く埋もれているためか、今までのところ周辺地帯では発見されていない。姶良火山灰の存在も未確認である。今後基礎工事などで深く掘削される場合には注意が必要であろう。

縄文時代の遺跡としては、三谷（みたに）遺跡(2)や名東（みょうどう）遺跡(6)において晩期の遺構や遺物がまとまって発見されている。三谷遺跡では貝塚が検出され、突帯文期の土器類や石器類が多数出土した。名東遺跡からも相前後した時期の土器類が多数みつかり、当該時期における周辺地帯の動向の解明は実証的に進みはじめた。最近の庄遺跡(1)の調査においても晩期前半の遺構や土器類が発見されている。このほか庄遺跡の中央病院地区や南庄遺跡(3)などからも、縄文時代後期から晩期にかけての時期の遺物が少数ながら発見されているので、資料数は今後とも増加するであろう。こうした状況をふまえると、縄文時代晩期には周辺一帯でも人々の活動が展開されたとみなければならない。鮎喰川対岸の矢野遺跡では最近の調査に

よって、縄文時代後期前半には人々の定着があったことが確認されている。したがって平野部における

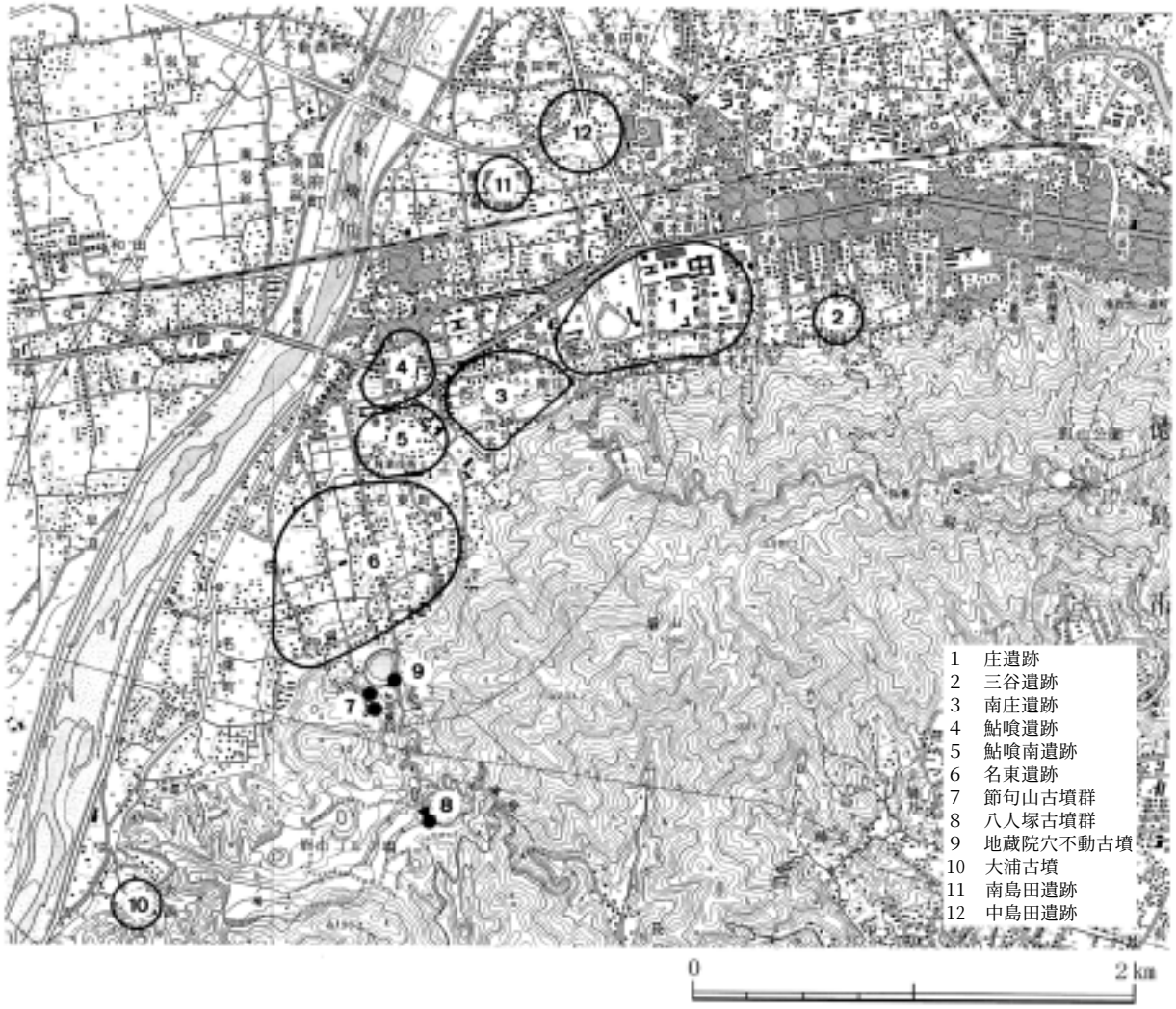

図７　周辺地域の遺跡分布図

縄文人の活動は、後期以降晩期にかけて着実に活発化したようである。

こうした縄文時代遺跡の展開が、続く弥生時代への変化にあたり、いかなる意義をもったのかについては、現時点での明確な所見は提示されていない。ただし、三谷遺跡では縄文系の土器類とともに弥生時代前期前半の土器が共伴関係をもって存在することが確認されている一方、同一型式の弥生時代前期土器を出土する庄・蔵本遺跡では、縄文系の遺物がきわめて少数であるといった対照的な状況がみられることは注目すべき現象である。徳島縄文人と弥生人との棲み分けがあったとも推定されるが、両遺跡の状況の多角的な把握が、この問題を掘り下げるうえでの有効な糸口になるであろうことは間違いない。今後の研究の進展が大いに期待されるところである。

弥生時代　弥生時代には周辺一帯のひろい範囲に集落遺跡が展開した。庄・蔵本遺跡の第 15 次調査で発見された前期集落は、２重の濠と柵列をめぐらす環濠集落であった。第６次調査では箱式石棺墓や配石墓、甕棺墓などで複合的に構成された墓域の発見があったことも重要である。この地で展開した稲作農耕文化は、その当初から弥生文化を特徴づける主要な要素を備えていたことが確実になったのである。また大規模な灌漑用水路や各種の木製農具類、収穫用具たる石包丁、炭化米の発見によって、この地でも水稲農耕は本格的に始動していたことが判明している。しかし水田自体の遺構はいまだ発見されてい

ない。本地域における弥生時代の生業を探る上でも水田跡の検出を急がねばならない。

続く弥生時代中期にみられる特徴的な状況は、名東遺跡を中心として方形周溝墓の造営が活発化することである。主体部構造については不明確な点が多いが、周溝がきわめて深いことが本地域の周溝墓の特徴だといえるかもしれない。この名東遺跡では方形周溝墓に隣接する場所から銅鐸の埋納坑が発見されたことでも知られる。銅鐸は扁平鈕式六区画袈裟襷文鐸で、埋納された時期は中期後半であろうと推定される。同じ名東遺跡の別地点では相前後する時期の住居跡内で、水銀朱の堆積した土坑や加工用具類が発見されている。先の銅鐸の表面にも全面に水銀朱が塗布されていた事実が最近の調査によって突きとめられており、この時期には周辺地帯で朱の活発な消費活動がはじまったことがわかる。朱の関連遺物は庄・蔵本遺跡でも多数出土しており、後期全般から終末期にかけて、周辺地域では朱の加工および消費が急速に普遍化したものと推測される。朱の消費活動も銅鐸の埋納とともに集落における祭祀の一端を担ったものと考えられるが、他地域にはみられない高密度の分布であることが注目され、本地域の弥生文化を特徴づける要素といえよう。なお庄遺跡の兵営西内線地区では前期から後期にかけての自然河川跡が発見され、中期末から後期前半を中心とした時期の多量の木製品類が出土した。このなかには木偶や剣形木製品などの祭祀用具や、建築材・農耕具などが含まれており、当地の弥生文化が多彩な内容をもっていたことが知られる。

古墳時代　古墳時代には名東遺跡の南側、眉山北麓の丘陵尾根上に前期古墳が点在的に形成される。小規模な墳丘をもつ古墳としては節句山古墳群(7)が知られており、箱式石棺の上に竪穴式石槨を付設した２号墳の主体部からは、舶載の四獣鏡が出土した。また同一丘陵の尾根上の一角には、全長60ｍ、後円部直径30ｍの規模をもち、川原石を積み上げた積石塚の前方後円墳として知られる八人塚古墳(8)がある。その後の中期段階の古墳はこの地域ではまだよくわからないが、後期には横穴式石室が出現する。節句山古墳群の東側の谷あいに築かれた地蔵院穴不動古墳(9)は、この時期の古墳の典型例であり、長大な石室を構築している。

これらの古墳を築いた人々の生活の場は、名東遺跡や庄・蔵本遺跡を含む眉山北麓の地域一円であったと考えられるが、その集落や生産遺跡についてはよくわかっていない。庄・蔵本遺跡では５世紀代の住居跡や区画溝、井戸などが発見されており、当該期の集落の存在が確認されたが、前後の時期の状況は不明である。

なお眉山の北側斜面一帯にかんする古墳の分布調査は不十分であり、未確認の古墳がどこかに存在する可能性は高い。調査の必要性が痛感されるところである。

奈良時代　奈良時代の遺構としては、庄遺跡および名東遺跡の数地点で大型建物跡が発見されている。このうち庄遺跡の加茂名中学校地点からは数棟の掘立柱建物と２棟の竪穴住居が検出され、多量の畿内産土師器が出土した。建物跡は正方位を指向するもので、遺物には製塩土器や線刻文字をもつ土器、鞴の羽口なども含まれており、これらは官衙的性格の建物であろうと推定されている。庄・名東両遺跡の３地点からは、役人が着用する帯の部品である石帯も出土しており、周辺地帯に官衙関連遺構がひろがる可能性は高い。なお名東町には、「名方（なかた）」の小字名が残っており、周辺地帯一円は名方郡名方郷に比定されている。ただし検出遺構が名方郡衙であるのか否かの解明は今後の研究にゆだねられる。

このほか奈良時代から平安時代にかけての遺構としては、庄遺跡や鮎喰遺跡（4）において流路や溝が発掘されている。これらの成果はごく限られた地点での点的な調査によるものであるために、配列関係の全貌を知るまでにはいたらないが、整然とした区画の存在を推測させる状況がみられ、広範囲を網

羅する計画的地割が施行されていた可能性がうかがわれる。その一方、庄遺跡から名東遺跡にかけての眉山北麓の平担地には整然とした方格地割の痕跡が明瞭に残されており、本地域でも古代条里制が施行されたと説かれている。なお、本地域の条里地割については、その主軸方位が真北から12度西に振れていることが特色として指摘され、施行年代の解明とともに、こうした振れの原因についての合理的な解釈が求められよう。こうした問題についての考古学的な実証作業が望まれるところである。

平安時代以降　平安時代には荘園が設置され、周辺の一帯は安楽寿院領の名東庄となっている。名東遺跡では県営団地建て替え工事に伴う発掘調査において、荘園遺跡の建物跡とみられる大規模な遺構が発見された。この荘園は幾多の紆余曲折を経ながらも南北朝期までは存続していたと考えられている。なお特殊な生産遺跡であるが、眉山北麓西端部に位置する大浦遺跡(10)では平安時代後期の鋳銅・鋳鉄炉が発見され、鞴の羽口や坩堝、銅滓、鉄滓などとともに密教法具類や仏具類の鋳型が多量に出土した。この種の生産遺跡としては全国初の発見例である。遺跡の付近には「僧図」の地名が残されており、密教系の宗教関連施設が存在した可能性も高い。

鮎喰川右岸の遺跡としてはもっとも吉野川寄りに位置する南島田遺跡（11）や中島田遺跡(12)では、鎌倉時代から室町時代にわたる川や溝などが検出されている。遺物には西日本各地の焼物に混じって中国製の輸入陶磁器がみられた。こうした成果から、中世には周辺地域一帯の可耕地がしだいに吉野川の方向にむかって拡大している事実と、川を利用した舟便による近隣地域との交易が盛んにおこなわれていたことを知る。

江戸時代から明治時代にかけての庄・蔵本遺跡周辺一帯は水田のひろがる農耕地帯で、現国道192号線にあたる旧伊予街道に沿って、佐古、蔵本、庄、名東、島田などの集落が形成されていた。このうち蔵本村は讃岐街道（現県道１号線）への分岐点にあたり、徳島城下西端の要所として位置づけられた。付近一帯に営まれた水田の水はけは悪かったらしく、庄・蔵本遺跡の各所では幾筋にも巡らされた暗渠排水施設が発見されている。

明治42年には旧陸軍の練兵場と兵舎が蔵本および庄に設置された。この造成事業によって、広大な範囲が造成土で覆われ、水田地帯であった本遺跡の周辺一帯は地下に埋没することとなった。敗戦後、これらの官有地は県営グラウンドや県立病院、徳島大学などの敷地となり今日にいたる。そして近年は周辺一帯の宅地開発が進み、農村集落としてのかつてのたたずまいは急速に失われつつある。